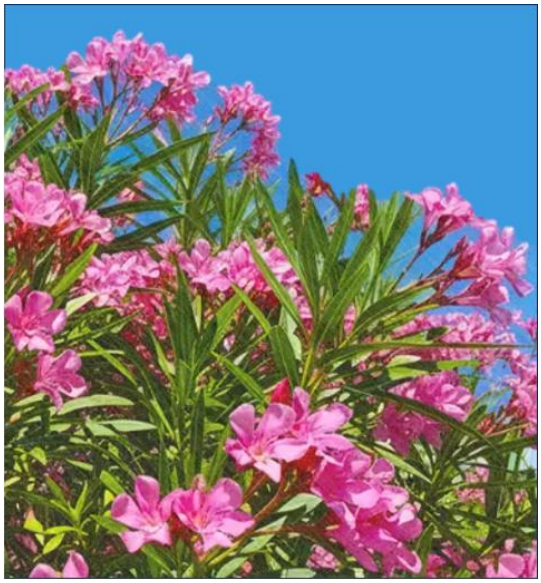
「キョウチクトウ」

廣瀬清一　事務局

夏の街を歩いていると、照りつける日差しの中でも鮮やかな花を咲かせるキョウチクトウに目を奪われることがある。紫紅、桃紅、橙紅、黄、白と花色は実に多彩で、しかも開花期は長い。暑さや乾燥に強く、大気汚染にも耐えるたくましさを備えていることから、公園や街路樹として全国各地で親しまれてきた。

尼崎市（1952 年）、鹿児島市（1968 年）、千葉市（1970 年）、広島市（1973 年）では、市の花にも制定されている。



キョウチクトウ（Nerium oleander）という名は、中国名「夾竹桃（jiāzhútáo）」を日本語読みしたものだ。竹に似た細長い葉と、桃を思わせる花、葉が花を「夾（はさ）む」姿が、その名の由来とされている。

原産地はインドから地中海沿岸地域にかけて。古代エジプトやギリシャ、ローマ時代には、すでに庭園や公共空間を彩る花として愛されていたという。

しかし、その美しさとは対照的に、キョウチクトウは植物全体に強い毒をもつ。葉、枝、花、根のすべてに有毒成分が含まれ、誤って口にすると命に関わることもある。そのため、ギリシャ神話では「美と危険」を象徴する植物として語られることがあり、古くから毒草として知られてきた。

一方で、その毒性は薬にも利用され、中国では葉や樹皮が生薬として用いられてきた。また、種子からは潤滑油が採られ、茎皮からは「夾竹桃麻」と呼ばれる丈夫な繊維が作られるなど、人との関わりは意外なほど深い。

日本へは江戸時代後期、オランダを経由して渡来したとされる。その後、関東以西の温暖な気候によくなじみ、高度経済成長期には排気ガスや煙害にも強い樹木として全国に植えられた。「公害に強い花」と呼ばれ、復興と都市緑化を支えた植物でもある。

ところが近年は、その毒性が改めて注目され、「見かけても触らないように」と注意喚起される場面も少なくない。街を彩るために植えられた花が、今では「触れない花」として語られるようになったのである。

それでも、花そのものは実に魅力的だ。ほのかに蜂蜜やアーモンドを思わせる、やさしく温かみのある甘いフローラルの香りを漂わせる。その可憐な姿からは、強い毒を秘めていることを想像するのは難しい。

夏の陽光に映えるその花は、少し距離を置いて眺めるのがいちばん美しい。「触らない、摘まない、食べない」を守りながら、夏の花を楽しみたい。

参考文献

1）千葉市緑と花の推進室の HP『夾竹桃の規制　対策』
https://www.city.chiba.jp/toshi/koenryokuchi/ryokusei/midoritohana/kyoutikutou.html

2）気象予報士パパの自然研究所『キョウチクトウの素顔−街を救った』
https://note.com/nature_wx_lab/n/n2d612089f124

3）百度百科『夾竹桃』
https://baike.baidu.com/item/